

能を切る



四賢婦人・矢嶋楯子の生涯

文 福永無想

第三回 「中山の郷」

残しゆく庭の桜も今日よりは
のちのあるじと共に栄えよ

直明の妻、鶴子は、湯浦での3年間の結びを、こう歌に詠んだ。天保12(1841)年、直明は惣庄屋見習いから昇進し、下益城郡中山手永(現・美里町)の惣庄屋として赴任することが決まった。

湯浦を離れる少し前のことだった。佐敷手永の惣庄屋、徳富美信が訪ねて来た。

徳富家とは、直明が湯浦に着任した直後から家族同士のつきあいを深めてきた。美信夫婦は矢嶋家の娘らの中でも、特に4女の久子の気立ての良さを気に入っていた。

「矢嶋さん、いつかお宅の久子さんを、我が長男、一敬の嫁にくださらんか」

「何とありがたい話でしょうか。これで私どもは縁続きになりますな」

と、直明は二つ返事で快諾したのだった。

中山の郷は、周囲を高い山々に囲まれた

山深いところで、山の斜面を利用して開墾された棚田が続ぎ、緑川とその支流を多く抱えていた。

堅志田村の一角に手永会所はあり、そこに惣庄屋の役宅もあった。直明は着任するやいなや、米や穀物の収穫量を増やすため、釈迦院川の水を引く用水路建設を計画した。やがて、村人を動員しての工事が始まるようになると、夜明け前には長男の源助を従えて家を出た。

「あいたー。もう矢嶋さまはきとんなはる」
「また、先ばこされたばい」

村の者たちは口々にそう言い、つるはしや鍬を抱えて駆けつけた。それから5年の月日を費やして「君野用水」は完成する。ちなみに、直明たちが築いた岩野用水は、現在も現役で活躍している。

「こら、おごごつばい、おごごつつ」

村中を震撼させる出来事が起きた。その頃、あちこちで天然痘が流行し、中山の郷も同じく、中でも幼い命が次々と奪われていった。直明は早急に対策を講じようと、源助に情報をかき集めさせた。

「皆さん、よう聞いてください。牛から取った菌の、種痘というものを腕に打てば、天然痘の予防になるそうです」

「ぼってん源助さま、牛になるという噂も聞くですばい」

「そげん、恐ろしかもんば、子どもたちによさせられまっせん」

あらぬ噂におびえる村人をどう説得したらいいものかと、源助は頭を抱え込む。

「兄さま、私が最初に打ちます。そんなら、村の人たちも安心しなはるでしょう」

名乗り出たのは10歳になった勝子だった。そしてこの勝子の勇氣により、村の子どもたちも続いた。このことで直明は、村の若者から優秀な人材を選び、長崎や江戸で蘭学を学ばせることにした。その人物が、のちに熊本藩の御典医となる中山至謙(※)である。

そんなある日のこと、役宅に玉名郡伊倉の竹崎律次郎に嫁いでいた順子が、やつれた顔で帰ってきた。

「しばらく、ここにおいでください」
と、順子は声を震わせる。

順子の夫の律次郎は、酒造業を始めたものの米相場に手を出し失敗した。竹崎家は破綻し、やむなく順子は実家に戻ったのだ。憔悴した順子に、迎える家族も言葉のかけようがなかったのだが、

「久しぶりに、順子ねえさまのご飯が食べられる！今夜から一緒に寝てよか？」

そう言つて、脳天気には振る舞う勝子の気づかずに、順子は救われるのだった。

※中山至謙／江戸・長崎で蘭学を学び、天然痘の研究に取り組む。明治4(1871)年にオランダ人医学者マンスフェルトが来熊し、古城医学校が開かれると医師として所属。同じ頃、北里柴三郎もそこに学んでいる。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)
※()は30人以上の団体割引料金

